

宮古—宮城・南三陸 計311キロ



コースの状況を確認する中尾益巳さん。三陸沿岸を舞台としたレースの実現を目指す＝大船渡市末崎町

東日本大震災から10年が経過した被災地で、宮古市から宮城県南三陸町までの計311キロを走破するステージレースを開催しようとする関係団体が準備を進めている。ボランティアで代表が三陸を訪れていたNPO法人「ディスカバー・リアス」(東京、中尾益巳代表理事)が10月に本県沿岸でプレ大会を開き、2023年に500人規模の本大会開催を計画。大会を通じて被災地の現状や三陸の魅力を発信し、将来的に国内外のランナーが集う国際レースを目指す。

三陸走破レース開催へ

23年に500人規模で 東京の10月にプレ大会



大会名は「ステージレース三陸311」。舗装路や山道のコースを6日間かけて走り、合計タイムを競う。1日当たりの距離は30〜60キロで、個人とチームの部を想定。コースは舗装路7割、山道3割で構成し、一部は三陸鉄道での移動区間を設ける。

中尾さん(59)は、富士山周辺のトレイルラン大会の運営に関わっていた際に震災が発生。ボランティアや旅行で三陸を訪れた時に目にした景色が心に残り、このほか、イベント

【Q】ステージレース 2日以上日程で、各日どこにスタート、ゴール地点が決まったレース。日本ではまだ一般的でないが、海外では砂漠地帯を7日間走破するサハラマラソンや、世界最高峰の自走車レース「ツール・ド・フランス」など有名。開催にはレース区間の地権者との交渉や、自治体への申請などが必要になる。

プレ大会と位置付けるのが10月に企画する「100ギステージレース」だ。宮古市—釜石市間を2日間で走破する内容で、50人規模の参加を見込む。復興事業で整備された防潮堤や大槌町旧役場庁舎跡地などを経由し、みちのく潮風トレイルの一部区間も通る。

中尾さんは「被災地でのこのような大会をしてみたいのかという思いもあったが、多くの苦しみや悲しみを経験した地だからこそ、挑戦の場にもなると思う」と意義を語る。

大会の問い合わせは同法人ホームページ(https://www.discover-ria.org/)へ。